

【やなむん】

「かいじい、ひとつ、きいてもええかのう」

これは特別な質問です。

「どうぞご遠慮なく」

「まえから、ききたかったども、にんげんは、なにものがつくったのかのう」

「そうきましたか。難しい質問ですね」

懐爺は腕を組みました。

懐爺にとって、難しい質問なんか、此の世にはないはずなのに。

「となりのおねえさんも、よくいうとったが、にんげんをつくったのはやっぱし、えらいかみさまかのう」

懐爺は静かに首をふりました。

「まじめな先生や、やさしい大人や、きよらかな女性が、よく、人間を創ったのは神様だといいますが、それはそう信じているか、もしくはそう信じただけのことで、真実ではありません。もし神様くらいの巨きな存在が、人間を創ったとしたなら、それは神様ではなくて悪魔か悪霊ですね」

「あくまくんかい。なぜじゃ」

「なぜって、もし本当に、神様が人間を創ったのなら、こんなに不完全な、不謹慎な、不明瞭なものにはしなかったはずです」

「にんげんたあ、そんなもんかい」

ちょっと意外でした。

ぼくは完全な人間になろうとして、学んでいるのだし、懐爺のところにも日参しているのですから。

「金ちゃんは、鳥や魚になりたいと、おもったことあるでしょう」

「そらあ、あるのう」

「それは、人間が空を飛べないし、水の中で暮らせないからです。飛行機とか潜水艦とかいっても、あれは邪道ですからね」

「たしかに、ふかんぜんじゃのう」

納得するしかない。

「たとえば、身体の不自由なひとを見かけたとき、人間の身体なんかも蜥蜴（とかげ）の尻尾みたいに、切れてもまた生えてくるんなら、どんなにいいかとおもったことでしょう」

「たしかに、おもうたのう」

了解するしかない。

「それほどに、人間は肉体的に、だめなものです。ましてや、精神的には、もっとだめで、弱いですねえ」

「かいじいは、つよいがのう」

「いえいえ、村長さんのところの、犬や猫のほうが、精神的にはずっと強い。人間

は、苦悩、煩悩、懊悩などなど、悩みが多すぎます。たしかに犬猫にも、喜怒哀楽はありますが、人間の喜怒哀楽は限りがありません。それは欲望というものもそうで、限りがないということが、不謹慎なわけです」

「なるほどのう」

首肯するしかない。

「かように、人間は不完全で不謹慎です」

「して、ふめいりょうとは」

「人間以外の動物は、雌雄がはっきりしています。けれども人間は、男を好きな男、女を好きな女、男になりたい女、女になりたい男、なんでもありです。人間以外の動物は、食べ物もはっきりしています。肉食草食という具合にね。けれども人間はなんでもありです」

人間以外というところに力をいれたのをみると、懐爺は、人間も動物の仲間にしたいのかもしれない。

「たしかに、ふめいりょうじゃのう」

しかし、不明瞭はいけないことなのか。

「神様ははっきりさせたいつもりです。しかし結果ははっきりしない。ということは、神様は神様としての力を発揮しなかったということです。力を発揮できない神様は紛いものであって、それは悪魔か悪霊の化身だからというのが、わたしのかんがえです」

「そんなもんかいのう」

「それでは今日はこれで」

懐爺は祠に消えようとします。

「さてや。だば、そのあくまくんは、なにもので、どこにいるんじゃ」

「人間を創った、かもしれない、悪魔とか悪霊を【やなむん】といいます」

「やな、なまえじゃのう」

「そうですか、なかなかいい名前だとおもうんですが」

「【やなむん】は、たいじできるのかのう」

「【やなむん】退治は、【ぱーんとう】の仕事です」

「【ぱーんとう】も、へんななまえじゃのう」

「そうですか、なかなかいい名前だとおもうんですが。もともと沖縄の言葉ですよ」

「おきなわいじょうに、もんだいがあるのう」

「もんだいありますか」

「【ぱーんとう】が【やなむん】をたいじしたら、にんげんをつくるものが、いなくなるではないか」

「それもそうですね。それなら、退治はやめておきましょう」

「やめておくと、まるでかいじい、【ぱーんとう】そのものみたいなせりふじゃのう」

「わたしは、そんな立派なものではありません」

しかしぼくは、懐爺こそ【ぱーんとう】にちがいないと、後で勝手におもうよう

になるのです。

というのは、どういうわけか懐爺が、戦前戦中ずっと沖縄に居た、と村長さんからきいたからです。

「しかも沖縄のおばけを、みんな連れてきよった」

と、呆れてもいましたからね。